

朝鮮詠の俳域

—朴魯植から村上杏史へ

中根隆行*

一．朝鮮俳壇の問題

海を越えた文学とは何か。日本から海外へという経路を考えると、まずもって思い浮かぶのは俳句とそのコミュニティ・ネットワークである。現在では北米を中心にした英語俳句を筆頭に、いまや俳句は日本語という関を越えていくつもの言語で詠まれている。日本語文芸の作り手に限定しても、俳句は、短歌とともに故郷を離れて異境に渡った日本人たちに詠まれてきた文芸である。なかでも日本統治下の朝鮮半島は、京城帝国大学の英語・羅旬語教師 R・H・ブライスから紐解かれる英語俳句の源流のひとつであり、在朝鮮日本俳人によって朝鮮俳壇とも称されるほど活況を呈していた地域である。

本稿の射程は、朝鮮半島における俳句の路程を朝鮮詠の俳域としてとらえることである。朝鮮詠といってもその担い手には三つの層がある。まずは高浜虚子、河東碧梧桐、飯田蛇笏といった渡韓経験のある日本内地の俳人の層。次に石島雉子郎や楠目橙黄子、日野草城らに在朝鮮の日本俳人の層。そして朝鮮俳人の層である。朝鮮俳句はこれら三つの層が交差連動することによって形成される。だが、朝鮮俳壇がホトトギス系俳壇中心であったことを踏まえるならば、そ

* 愛媛大学准教授。

こには日本内地と朝鮮半島の間には作句上の大きな懸隔が介在する。高浜虚子『熱帯季題小論補遺』は、一九三六年のシンガポール行での体験に基づく文章であるが、ここで虚子は異境で俳句を詠む際の心得について次のように述べている。

俳句は日本の国土に生れたもので歳時記は本土のものである。それを熱帯地方に持つて行つて移植する場合は多少の取除けが無ければならぬ。別に熱帯地方の歳時記を編むがよいといふ説もあるが、そんな風に地方で歳時記が出来たら俳句の統一がむづかしくなる。どこまでも本土の歳時記を尊重し、大体は其に準拠し、唯熱帯地方には特別の取除けがあることにすれば、いくら自由で作れることになるかもしれぬ。¹⁾

ここには、在外俳人もまた日本の歳時記を遵守するべきであるという考えが端的に示されている。たとえそこが異境の地であっても、独自の歳時記を編むことは「俳句の統一」を妨げるおそれがあるからだ。だが、それでは作句上、移住者の不都合もあろうから「多少の取除け」ならかまわないというわけである。高浜虚子は「日本人殊に俳句を作る人は花鳥諷詠に特殊の技能がある」として、花鳥諷詠を古来から受け継がれてきた生来の民族的技能であると位置づけ、また「北海道」「台湾」「樺太」「朝鮮」「満洲」「亜米利加」と順に挙げ、それぞれの地域における俳句の興隆を「かういふ風に国威が発展するに従つて俳句の勢力も四方八方に拡がつて来る」ととらえる人物である²⁾。つまり虚子は、海を越えた俳句の拡がりや日本による勢力拡張と同化政策の構図に則って把握しているのである。在朝鮮日本俳人が抱えた俳句の問題もここに存する。

朝鮮半島における俳句活動が本格化するのには、日韓併合条約が締結された一九一〇年以降である³⁾。この時代の朝鮮俳句を牽引したのは、朝鮮総督府の御用新聞に改変された『京城日報』の「京日俳句」欄である。京城日報社社長は『国民新聞』俳句欄の選を務めたホトトギス系の重鎮吉野左衛門であり、「京日俳句」

1) 高浜虚子『熱帯季題小論補遺』『定本高浜虚子全集』第十一巻、毎日新聞社、一九七四年。

2) 高浜虚子『私は矢張守旧派である』『定本高浜虚子全集』第十一巻、毎日新聞社、一九七四年。初出は一九三三年十二月。これについては榎沢健『プロレタリア俳句と花鳥風月—一九三〇年代における季題と植民地』(『續』第一二号、二〇〇〇年三月)でも論じられている。

3) 阿部誠文『朝鮮俳壇—人と作品』上巻、花書院、二〇〇二年。

の選者は石島雉子郎や楠目橙黄子に受け継がれている⁴⁾。この時期のことを橙黄子は「蓋我々はホト、ギスの俳句を以て我が俳句の正道と信じ、ホト、ギスに於ける虚子先生選の雑詠を句作上の最高目標としてゐた」と回想している。朝鮮俳壇はこの頃からホトトギス系俳壇が中心であり、高浜虚子の俳壇復帰とホトトギス雑詠欄の復活に歩を合わせたように徐々に発展の途をたどっている。

だが、一九一〇年代前半の朝鮮俳壇は試行錯誤の時期に相当する。「我朝鮮俳句界の趣向が多く中央俳壇の刺戟によつて動いたものであり、且又是に追従せんと努力した其の迹を知ることが出来る。又当時の代表的作句と雖も […] 大体に於て尚幼稚の境地に在るを免かれないと云へよう」⁵⁾。ただし、楠目橙黄子の回想では「唯当時既に朝鮮の風物を詠じて地方的特色を表現した句が多く生れんとしつゝあつたことは俳壇の一異彩であつたと信ずる」という一文もある。彼らがめざす朝鮮詠とは、その「地方的特色」の表現に求められている。このことは、朝鮮俳壇が高浜虚子を頂点とする日本内地のホトトギス系俳壇とは別の道を模索していたことを示している。

二. 朝鮮詠の俳域

俳誌『松の實』を中心に朝鮮俳句の拡がりをとらえよう。一九二〇年十月に石島雉子郎や楠目橙黄子らによって京城で創刊された『松の實』(松の實吟社)は、井上鳥三公の『かさゝぎ』(釜山、一九二四年創刊)や北川左人の『ナツメ』(京城、一九二六年創刊)など同時代に各地で発刊された俳誌のなかでもっとも代表的な俳誌として知られる。『松の實』創刊号と第二号は未見だが、第三号の後記にはこうある。「第一号発行後新入社員が約百名の多数に上り合計三百十八名を算するに至つたのは我朝鮮満洲俳句界の為め愉快に堪えません」⁶⁾。この当時、朝鮮における俳句結社がどれほどの規模であったのかは推測の域をでないが、こ

4) 蝸牛洞「雉子郎氏と朝鮮」『松の実』第三号、一九二一年二月。

5) 橙黄子「京城の俳句界と私(三)」『松の実』第七号、松の實吟社、一九二一年四月。

6) 橙黄子「社員諸兄へ」『松の実』第三号、松の實吟社、一九二〇年一月。

の文章を記した楠目橙黄子の『愉快』の感から察するに、社員総数三一八名は予想を超えたものであったことがわかる。また『我朝鮮満洲俳句界』とあるごとく、『松の實』は朝鮮半島にとどまらず、広く旧『満洲』地域を含めた外地俳句の進展をめざしていた。これは、朝鮮満洲地域の俳壇がまだ未分化であり、日本の俳壇に対して朝鮮満洲地域の俳句活動を総じて把握する意識が高かったからではないかと思われる。一九二二年三月に東京転勤のため約七年間の朝鮮生活を閉じることになった楠目橙黄子は、『松の實』創刊の目的を次のように振り返っている。

[...] 元来『松の實』発行の目的は朝鮮及満洲に在住する俳人相互間と、又内地に在つて特に此異境土に縁故と好感を持たるゝ俳人間との親しみを結びつける機関とするにあつたことである。此目的は今日之を達成されつゝあるだらうか。⁷⁾

その是非は措くとしても、ここには『松の實』創刊の目的が端的に記されている。在朝鮮在満洲における日本俳人相互の『親しみを結びつける』こと、すなわち俳句を通じたコミュニティ・ネットワークの構築である。そもそも外地あるいは海外移住者における俳句は、作句活動にいそむことで日本人たるアイデンティティを改めて確認し、句会参加や俳誌への投稿によって移住者同士の絆を密にするためのツールでもあった。異境の地にあつて母国の文芸を通して仲間を作る。その意味で俳句は移住者たちにとって最も身近な文芸であったのだ。それゆえであろうか、『松の實』が創刊当初にめざした俳句のあり方はきわめて単純明快なものであった。『本誌創刊に当つて私達は右の声明をしました [／] 『別に俳壇の一權威とし、斯壇に貢献しようなどゝは思ひません。只朝鮮の色、満洲の臭ひを表したら可いのです。』と』⁸⁾。つまり、日本内地の俳壇に対抗して外地俳壇の確立や外地詠の独自性を企図するというよりも、移住者の暮らしに立脚した異境の地の『色』や『臭ひ』を俳句に詠むことが推奨されていたのである。

だが、『松の實』創刊に呼応するかたちで、外地俳壇の確立や外地詠の独自性

7) 橙黄子『お別れの言葉』『松の實』第一九号、一九二二年四月。

8) 無記名『句集出版のこと』『松の實』第二八号、一九二二年一月。

を求める声が朝鮮満洲各地から寄せられることになる。『松の實』投稿欄には、京城のみならず朝鮮満洲各地の地方社員による俳句関連記事がほぼ毎号にわたって掲載されているのだが、第三号には葉舟「慈山より」と題される投稿が掲載されている。ちなみに冒頭には「葉舟の住む淋しき邑内は、誰を友とするでもなく、只我が妻や母を相手として、俳句に娛しむの外はありません」とある。彼は慈山で商店を営むかたわら作句に専心し『ホトトギス』『曲水』そして『松の實』を購読する人物である。

此度松の實が発刊されましたので、私等の写生は一層拡大されました、其れは他でもありません、今迄は朝鮮の事情の句を東京に送つて失敗する事が多く、随つて目前の実写をしても詰らないと思ふ事が幾度かありました。松の實が今から一年の予定とは、余りに底寂しさがあります。何所へ転住なさるとも出来ないといふ仕事ではないと思ひます。何卒永久に我々移住者の為めに、朝鮮、満洲の大自然を開拓して下さい。⁹⁾

文中に「東京に送つて失敗する」とあるのは、『ホトトギス』の雑詠選や課題選などに俳句を投稿するも、その選に漏れることを指している。俳誌というメディアの特徴は、たんに俳誌を読むだけでなく、社員が投稿した俳句が選者によって選録されるという双方向的な性格にあり、それが社員じしんの発奮材料ともなるのだ。それではなぜ葉舟は選に漏れたのか。彼はその理由を「朝鮮の事情の句」という点に求め、自分の俳句は評価されないのだから「実写をしても詰らない」と慨嘆する。ここには歳時記を例にとって前述した季題や花鳥諷詠に準拠したホトトギス系俳句の閉鎖性が窺える。それゆえに葉舟は、朝鮮で誕生した『松の實』に「我々移住者の為めに、朝鮮、満洲の大自然を開拓して下さい」と要請するのだ。

もう一例、楚川「鴨緑江畔より」という投稿にはこう記されている。「茲に面白いのは此等の俳句会や俳人が皆鴨緑江岸に片寄つて居る事です。是を要するに平北の俳句界も多少の変遷はありますがまだ／＼幼稚で寂寥たるものです。何とかして俳句の領域を拡めたいと苦心して居ます」¹⁰⁾。これは平安北道在住者によ

9) 葉舟「慈山より」『松の實』第三号、一九二〇年一月。

10) 楚川「鴨緑江畔より」『松の實』第三号、一九二〇年一月。

る短信であるが、『松の實』はこうした地方俳句の情報を各地の社員に発信する役割を担ってもいた。そして、葉舟の要請にせよ、楚川の初心表明にせよ、『松の實』地方社員の声は、各々の居住地の俳句情報とともに、朝鮮満洲における俳句の拡大を切望する点で一致している。

このような朝鮮満洲地域の地方俳人の声が創刊直後の『松の實』に届く。そうした声を受けてか、続く第四号には楠目橙黄子の「朝鮮と季題」と題される俳論が掲載されている。橙黄子はまず、日本在住者の生活における風俗習慣をフォーマットすることによって成り立つ季題にかんして「我々朝鮮に在住する者が句作に当つて常に不自由を感ずるのは、俳句の季題趣味を十分に味ひ難き具合が多いことである」と述べ、在朝鮮日本人の作句の困難を指摘する。そのうえで「けれども翻つて考へて見ると此不自由を補ふべき点が、朝鮮在住者に多々与えられてある」として、朝鮮の景観や朝鮮民族の風俗といった「我俳句の新らしい材料」をあげる。この意味で「朝鮮は俳句の処女地」となり、これらを「新季題」として吟詠することが朝鮮詠の特長なのだという主張である。

我々朝鮮に在住する者は、句作に当つて常に見聞に不自由なる季題に就て句作し且つ苦しむよりも眼界を新にしてこういふ方面に季題を研究することに努めたならば句作上好結果を得はしないか。俳句に於て最尊重すべき写生は自己の周囲に眼を注ぐことが其第一歩である。¹¹⁾

朝鮮の実態にそぐわない日本の季題趣味や歳時記に縛られながら異境の風物を詠ずるよりも、いまここに自分がある異境の地を詠むこと。これは楠目橙黄子による朝鮮詠独自の「新季題」の提唱である。なかでもその根拠に「自己の周囲に眼を注ぐ」「写生」の概念を据えたことは注目に値しよう。このようにして作句・俳論の両面から朝鮮俳句の形成が進められる。そして、この独自性にかんする議論は、やがて在朝鮮日本俳人の地域的アイデンティティにかかわる問題へと接合される。

11) 橙黄子「朝鮮と季題」『松の実』第四号、一九二一年一月。

俳句が日本民族の独特の芸術であつて、日本の国土によつて培はれ成長した所以を考察する時には、俳句は全く一つの郷土芸術であると言ひ得るのである。

〔／〕此郷土芸術としての俳句を、我朝鮮に移して新なる朝鮮の俳句として特色を完美せしめることは、朝鮮に於ける日本人の新文化的建設を実現する一面ではなからうか、私は我々朝鮮に在つて俳句の新天地を開拓せんとする者は、此大なる抱負と希望を以て努力すべきであると信ずるものである。¹²⁾

ここでは、朝鮮詠による新季題の提唱に始まった議論が「新なる朝鮮の俳句」を在朝鮮日本人の郷土芸術として立ちあげる議論へと変換されている。これは外地の移住者に特有の傾向といえよう。日本内地の俳壇に対抗して朝鮮俳句の独自性を唱え、朝鮮詠の俳域を広げようと訴える『松の實』同人の主張は、かたや一方で在朝鮮日本人による「新文化的建設」というあたかも植民地主義的な性格を帯びる地域的アイデンティティ形成の主張へと導かれるのである。

三. 木浦の朝鮮俳人朴魯植

俳誌『松の實』にみたとおり、朝鮮の日本俳人は、日本の俳句とは異なる朝鮮詠を「郷土芸術」としてとらえ、その俳域の拡張をめざした。『松の實』の創刊から始まった一九二〇年代は、京城のみにとどまらず、朝鮮半島各地の俳句活動が盛んになり、大小さまざまな俳句結社が生まれた時代である。活況を呈する朝鮮俳壇、それを象徴するひとつの成果が一九三〇年の北川左人編『朝鮮俳句選集』の刊行である。『朝鮮俳句選集』は、一九二七年から三年間に発行された俳誌や日本語新聞掲載の朝鮮俳句五万数百句が蒐集され、なかでも秀逸な一万余句を季題別に載録している。編者は刊行に際して次の二点を特に強調する。ひとつは朝鮮満洲地域に固有の季題蒐集である。『朝鮮俳句選集』は朝鮮詠のための歳時記的性格を併せもっているのだ。そして、もうひとつが朝鮮俳人による俳句の載録である。本選集「巻末の辞」には新季題蒐集に加えて「輓近、朝鮮人にして俳

12) 橙黄子「朝鮮色の句」『松の実』第一六号、一九二二年一月。

句に親しみつゝあることの意外に旺んなる実情を知り得たこと」が成果として特記されている¹³⁾。

だが、朝鮮俳人の誕生は、なにも『朝鮮俳句選集』によってはじめて明らかにされたわけではない。朝鮮俳壇が活況を呈する一九二〇年代、日本俳人らにとって朝鮮俳人の存在はすでに自明であった。全羅南道は木浦かりたご社の朴魯植(一八九七—一九三三)がいたからである。北川左人「湖南俳壇を覗く(三)近ごろ二つの刺戟」は、一九二八年に木浦で開催された全鮮俳句大会の模様を「我々俳壇それは斯くしておもむろに新しい境域を発見し、新しい方面に展開することを喜ぶ」と伝え、木浦の地方俳壇と朴魯植にかんして次のように紹介している。

由来木浦の地は、否、木浦の俳壇は、恵まれようとするには余りに地の利を得てゐない。新しい風潮に親しまうには余りに中央と遠ざかつてゐるかに思はれてゐた、[...] 偶ま数年前、福岡の天の川主催吉岡禅寺洞氏の来遊に刺戟されてか、爾來年を逐うて新しい作家、将来ある作家が多くなつた。その随一に数ふべきものに朴魯植氏がある、三猿郎、[...] 柳浦、兎徑子、星洞氏らまた中堅として目覚ましく活躍してゐる、¹⁴⁾

木浦の朴魯植は、その当時すでに朝鮮内外のホトトギス系俳壇で知られる存在であった。彼は一九二一年春に俳句を始め、早くも「僅か飛んで泥這ふ羽虫や夏近し」(橙黄子選松の實雑詠)他三句が『松の実』第二号(同年六月)に選録されている¹⁵⁾。そして、翌年九月には「川添の町幅広し夏柳」によってホトトギス雑詠初入選を果たしている。彼は一九三三年に三十八歳で夭折するまで一万余句の俳句を残し、「朝鮮の子規」と称された朝鮮俳壇の実力者である¹⁶⁾。俳句活動に専心した十二年間は「天才的詩囊に努力の拍車を打つて

13) 北川左人編『朝鮮俳句選集』青壺発行所、一九三〇年。

14) 北川左人「湖南俳壇を覗く(三)近ごろ二つの刺戟」『京城日報』一九二七年六月二一年。

15) 朴魯植が俳句を始めたのは知人に木浦の白藻吟社を紹介されたことがきっかけである。最初の一句は「芝を焼く烟かるく這ふ池の面」とされる(北川左人「逝ける俳人朴魯植君(上)」『京城日報』一九三三年五月二八日)。

16) 他の評を一例あげる。「師もなく新風の俳句を創造して行つた芭蕉も偉いが人情風俗言語を異

内鮮の俳壇にその名を馳せ、課題或は雑詠の選者として関係する俳誌さへ十六、直接の指導を受くる地方句会も十指に余る」という八面六臂の活躍であった¹⁷⁾。彼こそが『朝鮮俳壇における功労者中の功労者』であり、『同誌〔『かりたご』〕および京日紙を通じて俳句の朝鮮を親切に導き有力なる俳家を排出せしめた功績は、吾が俳壇史上特筆に値する』と高く評価されている。¹⁸⁾

しかし、なにも彼にかぎったことではないが、朴魯植は徹頭徹尾、日本と朝鮮を跨ぐホトトギス系俳壇のコミュニティ・ネットワークのなかから誕生した朝鮮俳人なのである。白藻吟社で俳句を学び、木浦に来遊した福岡の俳誌『天の川』主宰の吉岡禅寺洞や京城の安達緑童らに指導や添削を請い、一九二七年三月の木浦吟社『かりたご』創刊の際には福岡の清原枌童に選者を依頼し師事している。ちなみに清原枌童は後日『かりたご』のために木浦に転居している。また、朴魯植には来日経験が一度もない。その短い生涯の多くを木浦で暮らし、ここを根拠地にして俳句活動に専念した人物である。だが、それはホトトギス系俳壇のコミュニティ・ネットワークが機能していたことの証左であり、当然のことながら彼の朝鮮詠もまたそのネットワークを通じて朝鮮や日本に発信される。

朴魯植とその俳句が、畏敬するも一度も面会を果たせなかった高浜虚子に強い印象を与えた事実は、その象徴的な例といえる。『新歳時記』(一九三四年)に彼の朝鮮詠六句を選録した虚子にとって、『ホトトギス』や『京日俳句』の常連であった朴魯植とは、在朝鮮の日本俳人から伝え聞いたその人となりも加えて、あるべき朝鮮人ともいうべき存在であった。虚子は彼個人のために俳句三句を寄せている。『かりたご』創刊の際の祝句「此の土地に此の人により雪解かな」(一九二七年三月)、肺結核悪化のおりの見舞句「勸請す俳句の神に初詣」(三三年一月)、そして弔句「朝鮮の俳諧伝や朴魯植」(三三年七月)がそれである。とりわけ最初の句には、朴魯植がたんなる俳人ではなく、俳句の道を選んだ非凡な朝鮮人への驚異の情が詠まれているのがわかる。

にする身で、俳句の大成された朴魯植氏も偉いと思ふ。日本人で英詩をよくする野口米次郎氏の嘖々たる盛名を思ふ時、朴魯植氏の名も後世に遺つて好いと思ふ。(安達緑童『鮮人と松尾芭蕉』『かりたご』第七卷第五号、一九三三年七月)。

17) 村上杏史『朴さんの遺稿』『かりたご』第七卷第五号、一九三三年七月。

18) 北川左人『逝ける俳人朴魯植君(中)』『京日日報』一九三三年五月三〇日。

それでは、この朴魯植という朝鮮俳人を、朝鮮詠の俳域が広がるなかでいかに位置づけたらよいのか。歌留多の名手であり浪花節を好み、俳句に専念する以前は短歌や川柳で雑誌掲載を得た経験もある朴魯植は、いわば宗主国文化にかぶれた朝鮮総督府の同化政策の、というより日本の植民地主義の申し子のような存在にみえる。だが、奇しくも柳原極堂が松山で『ほとゝぎす』を創刊した年に生まれた朴魯植は、植民地教育を受けた世代では必ずしもないし、ほぼ同世代である李光洙や金東仁らのような日本留学経験のある学歴エリートでもない。俳句をもって注目される以前の朴魯植は、朝鮮半島西南部の港湾都市の、規模は小さいながらも早くから日本人町が形成された木浦という地で暮らした日本文化に惹かれたひとりの朝鮮人にすぎなかった。

もとより、朝鮮人でありながらも、俳句を通じて在朝鮮日本人と親交が深かった朴魯植は、木浦の朝鮮社会では「親日」として批判に晒されていた。「親日と言はれて住めり花ばかち」(一九三一年)。けれども他方で、その容貌は白哲美鬚とも称されるごとく、つねに朝鮮伝統の白衣のバジチョゴリでとおした人物であり、みずからの民族的アイデンティティにきわめて自覚的であったことが窺える。朝鮮総督府の社会政策として白衣禁止運動が喧伝実施され、都市部よりも地方のほうが高い効果をあげていた同時代の文脈を踏まえても、朴魯植を「親日」と短絡するのは早計にすぎる。¹⁹⁾そのうえで考えてみたいのが俳誌『かりたご』に設けられた彼みずから選者を務めた「神仙爐俳壇」欄である。神仙爐とは卓上で具材を煮込む器であり、朝鮮伝統の宮廷料理の名でもある。すなわち「神仙爐俳壇」は朝鮮人投句者のための特設欄で、「鮮人にホ句はやるなり月の秋」(『ホトトギス』一九三三年二月)という句にもあるとおり、朴魯植は朝鮮俳人の指導育成に力を注いでいた。この句の詞書には「同行者五十余人を算す」とあって規模も大きく、管見の限り唯一の朝鮮人専門の俳句欄であり、金玉峰や李永鶴を筆頭とする後進を多く輩出した朝鮮俳人の登龍門であったのだ。このような経緯を踏まえて朴魯植を考える場合、彼が植民地主義の申し子であったという結論はさして意味をもたない。まさしくそのとおりであるからだ。

19) 「あなたは白衣を廃しなさい そして経済的な色服を」『朝鮮朝日』南鮮版、一九三三年四月一五日。

問わなければならないのは、「親日」と呼ばれながらも朝鮮俳人であり続けた朴魯植という存在が、日本の植民地主義と俳句との間にどのような変容をもたらしたのかという点にある。

四. 朴魯植から村上杏史へ

朝鮮俳壇が日本内地とは異なる独自の方向に舵を切りつつあったとき、その俳域の拡大のなかで朴魯植という朝鮮俳人が誕生する。この経緯は植民地における日本語文学を考えるうえでも重要である。ホトトギス系の朝鮮俳壇における彼の朝鮮詠の特徴は、「著想が非凡」「詞藻が豊富」という点に加えて「思想が穩健」「手法が確実」であることに求められていた²⁰⁾。天才肌でありながらも温厚篤実といったこのような評価には、高浜虚子による朴魯植への献句にも示されていたように、彼がどう考えていたかにかかわらず、親日的な朝鮮人という鑄型のなかに囲い込まれてしまうのは常套である。

けれども、朴魯植の側から考えるとどうか。端的に言えば、彼の思想的立場は、親日派のなかでも張赫宙や崔載瑞とも異なる漸進的保守主義と位置づけられる。加えて『神仙爐俳壇』での活動にみられるように、みずからが朝鮮俳人であるという矜持をもちながらも、朝鮮人／日本人という民族性に基づく差異にきわめて意識的であったのだ。そうであるからこそ、朝鮮社会から「親日」と呼ばれることに対する葛藤や苦悩、宗主国の文芸である俳句に秀で高浜虚子を畏敬するも、白衣のバジチョゴリという民族的衣装を身につける二重性を併せもっていたのである。それは彼の朝鮮詠にも認められる。以下の三句は、高浜虚子編『新歳時記』に選録された朴魯植の俳句である。

春愁や窓を開くればもとの山
 貰兒のまるまる肥えて天爪粉
 瓢疵惜しまれながら育ちけり

20) 北川左人『逝ける俳人朴魯植君(下)』、『京日日報』一九三三年五月三十一日。

『春愁や』では、春の到来に浮き立つ気持ちとは裏腹に満たされない憂鬱が吐露されている。その情に反して変わらない姿で窓の外にあり続けるのが『もとの山』なのだから、詠まれているのはじしんのアイデンティティと変化の問題である。また、血の繋がりのない子の『まるまる肥え』た姿を詠む『貴兒の』の句では、なぜここで『貴兒』なのかという疑問が残る。たとえば、ここに朝鮮人でありながら俳句の道を進む彼の姿を重ねるとどうなるか。『瓢疵』の句でも同様に、『疵』さえなければ見事な青瓢筆となるのであろう、その成長を惜しみながら見つめ続ける温かいまなざしが確認できる。これら三句に共通するのは、詠む主体や詠まれる対象になんらかの翳りや軋み、あるいは欠損が指摘できるという点である。

もとより、このような解釈が成り立つかどうかはあまり問題ではない。また、これらの俳句は、写生された内容だけでは朝鮮詠とさえいえず、したがって解釈はさまざまな可能性に開かれている。おそらく高浜虚子がこれら朴魯植の俳句を載録した理由は、日本内地の俳句といってもやぶさかでないその一般性にあったと思われる。ところが、ここに朴魯植という固有名を付け加えて詠むことで、俳句の印象は一変する。この三句に詠み込まれた翳りや軋み、あるいは欠損は、朝鮮俳人朴魯植という被支配民族と宗主国文学にひき裂かれた主体の揺らぎが銘記されているかのように感じられるからである。

このように朴魯植を考えると、ひとりの在朝鮮日本俳人のことが頭に浮かぶ。朴魯植の死後、清原柊童が病いのために帰国してから木浦の俳誌『かりたご』を主宰した村上杏史(一九〇七—一九八八)である。彼は一九一七年に朝鮮に移住し、全南新報社の記者として木浦で生活するなかで、俳句に興味をもち『かりたご』の同人になった人物である。以下は、村上杏史の第一句集『高麗』の自筆年譜からの抜粋である。

昭和二年友人朴魯植からの年賀状に『抱へるれば事足る子なり大手毬』があつて興味を覚え、三年柊童選『カリタゴ』が創刊せられて参加、四年朴魯植の『春の山』(虚子命名)の植樹記念句会に初めて出席し、五年清原柊童の木浦来住を機に入門、直接指導を受ける俸せに浴した。〔／〕六年五月号ホトトギス初入選。八年一月丸ビルにて虚子に初面接。九年より『カリタゴ』編集に参加。²¹⁾

それまで俳句とは無縁であった村上杏史がその道に入るきっかけとなったのは、朴魯植からの賀状に綴られた彼の俳句であった。文中の「春の山」とは、朴魯植の病状を心配した俳句仲間たちの寄付をもとに購入した山を指し、また一九三三年の虚子訪問の際に託された短冊が前述の「勸請す俳句の神に初詣」である。村上杏史にとって朴魯植は年長の畏友であり、清原枌童とともに俳句の師でもあった。「つばくらや 樞に傘をさしかさね」(一九三三年)。これが夭折した朴魯植への弔句であり、その遺志を受け継ぐかのように、村上杏史は彼の遺族の世話をしながら、戦時下の統制によって経営が困難になるまで『かりたご』の運営編集に尽力することになる。

ここには大変興味深い経緯が見受けられる。宗主国日本の純国産の文芸が植民地朝鮮に移植され、やがて朝鮮俳人が誕生する。そして、朝鮮俳人の俳句に惹かれたことが機縁となって新たに日本俳人が生まれるという経緯である。この後の村上杏史は、戦時下には朝鮮文人報国会理事や高浜虚子の推薦によって日本文学報国会会員となるものの、一九四一年から二度の応召を受け、敗戦を北朝鮮で迎えることになる。引揚直後には「朝鮮が憎くて恋し天の川」という句を詠んでいる。

ここまでであるのなら、朝鮮の畏友との出会いから艱難辛苦の引揚に終わる在朝鮮日本人の物語として片づけられるかもしれない。だが、敗戦引揚後の愛憎入り混じる朝鮮への想いは、郷愁にも似た愛しさとなって詠み続けられている。「月の面に高麗もうつると思はずや」(一九四六年)。その村上杏史の朝鮮詠のなかに「月秋や高麗へまた書く片便り」(一九四七年)という句が残されている。もちろん、この「片便り」ではないのだが、彼は韓国に一通の手紙を送っている。「戦後のホトトギスに、朴魯植の點じた灯火が一つだけ残つてゐるやうに、韓国、李桃丘子の名が見られた。未知の人ではあるけれども、俳諧に繋る縁をたよりに朴魯植遺族の安否を探ねる事を依頼した」²²⁾。そして、三年後に「神仙爐俳壇」にもその名のみえる息子の朴琪鐘ら遺族がソウルで健在であることが判明する。しかし、それよりも注目したいのは、この一通の手

21) 村上杏史『高麗』柿発行所、一九六七年。

22) 村上杏史『朴魯植とその遺族のこと』、『ホトトギス』一九三二年二月。

紙から韓国の俳人との交流が新たに始まることである。村上杏史は松山の俳誌『柿』に参加、のちに主宰することになるのだが、この『柿』の会員には、李桃丘子や崔炳璉ら数少ない韓国俳人が名を連ねているからである。

一九八三年五月十五日、韓国ソウルで牡丹忌句会が開催されている。牡丹を好んだ朴魯植の没後五十年を偲ぶ句会である。参加者は、李永鶴と李漢水(桃丘子)そして崔炳璉の三名、村上杏史から献句二句が贈られている²³⁾。朝鮮詠の俳域が広がるなかで誕生した朝鮮俳人朴魯植から村上杏史、そして解放建国後の韓国俳人へというこの繋がりをいかにとらえたらよいのか。朝鮮俳句は、確かに植民地主義の力学に基づき朝鮮半島に移植された日本の文芸にほかならない。しかし、木浦の朝鮮俳人朴魯植をプラットフォームにした俳句が松山の村上杏史を経由して現代の韓国俳人に繋がるとき、そこに認められるのは、日本の植民地主義と植民地の日本語文学との不安定な関係が、なによりも俳句のコミュニティ・ネットワークによって明らかにされたということである。

朴魯植が俳句を始めたのは知人に木浦の白藻吟社を紹介されたことがきっかけである。最初の一句は『芝を焼く烟かるく這ふ池の面』とされる(北川左人『逝ける俳人朴魯植君(上)』『京城日報』一九三三年五月二八日)。

23) 崔炳璉『韓国語と日本語と-言葉の比較文化』講談社、一九八五年。